

2018年の漢詩の会は、李清照のユーモラスな〈詞〉を味わうことから始まりました。李清照といえば中国文学史上最高の女流詩人として非常に高く、また現代中国でも、特に女性たちの間で大人気を誇る詩人です。

北宋末期の1084年、山東省済南で文人の娘として生まれ、18歳で金石学者の趙明誠と結婚。夫の専門である金石文の蒐集、研究を助け『金石録』を完成させました。李清照は非常な才媛で、趙明誠とは相思相愛の仲でした。二人は共に酒を酌み交わしたり詩を唱和したりしていたそうです。当時としては珍しく、夫婦は共通の目標に向かって進んでいたのです。彼女はまた非常に卓越した文学センスを持った詩人であり、同時に女李白とも言うべき酒豪で、男性の文人達と詩酒を交えて堂々と渡り合った、文字通りの女傑だったようです。項羽の事跡を歌った男性的な絶句も残しています。

一方、夫君の趙明誠は優秀な学者でしたが、どうやら詩のセンスは奥方には遠く及ばなかったようで、彼女がまとめた研究には、夫君の詩が一首も入っていないそうです。「旦那の詩が自分より

遥かに劣っていたので、後世に恥を残さないために抹殺したのかな。だとすれば、これも一種の夫婦愛ですかねえ。」と植田先生。

そんな仲睦まじい夫婦でしたが、金軍の侵攻、北宋の滅亡(1126年)、王朝の南渡という国難の後、夫の趙明誠は病気で亡くなってしまいます。戦乱に巻き込まれて一家離散という憂き目に遭った上に、再会後の夫との死別という二重の不幸が襲いかかりました。相次ぐ戦乱により、膨大な蔵書、大量の文具、書画、骨董、拓本などの資料を次々と失い、悲惨な晩年を送ったと伝えられていますが、正確な没年も分からないそうです。

しかし、夫亡き後も夫の研究を後世に残し、また自身の詞文集『漱玉詞』(後世の編)を残すという偉業を成し遂げた李清照。波瀾万丈の時代を生きぬいた女流詩人の人生ドラマに一同すっかり魅了されたところで、今回の〈詞〉の鑑賞となりました。

今回の〈詞〉は〔如夢令〕という作品です。「令」とは小令という短い歌のことです。「夢小唄」といった感じでしょうか。以前にもご紹介しましたが、〈詞〉にはそれぞれに決められた形式の楽曲名が付いています。その楽曲名のことを〈詞牌〉と言

Rú mèng lìng 如梦令

zuò zhě lǐ qīng zhào
作者：李清照

zuó yè yǔ shū fēng zhòu
昨夜雨疏风骤

nóng shuì bù xiāo cán jiǔ
浓睡不消残酒

shì wèn juàn lián rén
试问卷帘人

què dào hǎi táng yī jiù
却道海棠依旧

zhī fǒu zhī fǒu
知否知否

yīng shì lǜ féi hóng shòu
应是绿肥红瘦

如夢令

作者：李清照

昨夜は激しい風ちの中を大粒の雨が降っていた。

ぐっすり眠ったが、まだ昨夜の酔いが醒めきらない。

寝坊している私のところに、誰かが簾を挙げに入ってきた。

ちなみに「庭のカイドウの花はどうなった?」と尋ねてみると、

こともあろうに「昨日のままですよ」と答えるではないか。

「そんなはずはないでしょう、分かっていないわね、あなた!

雨で花が散ってしまって、葉ばかりになっているはずよ」と私はつぶやく。

ます。作者は自分の選んだ〈詞牌^{ツバイ}〉の形式に合わせて、まるで替え歌を作るように歌詞を付けます。〔如夢令〕とは、その〈詞牌^{ツバイ}〉に付けられた名称の一つで、歌詞の題名ではありません。李清照のこの〈詞〉には歌詞の内容を表わす題名がついていませんが、〈詞牌^{ツバイ}〉の題名さえあれば歌詞の題名は付けても付けなくてもかまわないのです。

〈詞〉はもともと唐の都の王侯貴族のために、芸妓たちが歌っていた演歌のようなもので、〈詞牌^{ツバイ}〉の種類はなんと500以上もあるそうです。〈詞〉は本来女性の芸能ですから、女性的な趣向の歌詞（和歌で言えばたおやめぶり）が多いのですが、今日残る作品の多くは男性の詩人が女性の気持ちになって詠ったものです。しかし、李清照はその特徴を生かして女性にしか書けないような作品を残しています。

「いやあ、この人の詩には二日酔いが多いんですよ。呑んだくれの奥様が朝寝坊しているところに、召使いが入ってきて、奥様、朝ですよ、とばかりに簾^{すだれ}を挙げるんですがね。「庭のカイトウの花はどうなったかしら？」と尋ねるとこの召使いは田舎育ちの、働き者だが無粋なイモね一ちゃん。美的センスとは程遠い人。花なんかに興味がないんですよ。二日酔いの奥様の寝姿を見てウンザリしている。なので、外を見もしないで『昨日と変わっていませんよ』と答えたもんだから、この女主人、少々カツンときたのか、『あんなにひどい雨風で、花が散ってないわけがないでしょうが！』とぶつぶつ小言をいっているわけなんですよ。知っているなら訊かなければいいのにねえ……。」

植田先生の解説がまたユーモアたっぷりです。二日酔いで寝坊を繰り返す、呑んだくれの風流な奥様と、田舎育ちの花より団子の召使いのユーモラスなやり取りを切り取った日常の一コマ。こうしてみると、なるほど男性には書けない魅力に溢れています。

「女性の作った女性的な詩ですが、どこかピリッとしたものを感じます。長谷川町子さんの4コマ漫画に通じるものを感じるんですけどね」

「私も昔読んだ時には意味がよく分からなかったんですよ。意味は分かったつもりでも、どこが面白いかわからない。しかし何度も読んでいると場面が浮かんで来て、ああ、何と面白いなあ、と感じるようになりました。私のような無粋な男にはこの詩の意味がすぐにはピンとこなかったんでしょ」と植田先生。

ところで、この簾を巻き上げに来た人は夫の趙明誠であるという説もあるそうです。「旦那が文学的センスに欠けるということを書いたかった、ということでしょうけどね。それでは旦那があまりにもかわいそう。そこまで言わなくてもいいでしょう」と植田先生。やはりお寝坊の詩人の奥様と対照的な村娘の、たわいもない会話として読んだ方が4コマ漫画を楽しめる気がします。

最後の句の「緑肥紅瘦」は四字熟語となって後世の詩人もよく真似て使っているそうですが、なかなか素敵な表現です。日本だと桜が散って葉桜になりかけの頃でしょうか。こういう晩春の情景が詞の世界では最も寂しい情景なのだそうです。ここでホトトギスが鳴いたりすると一層寂しさを掻き立てるそうです。

「青春が去っていくというわけで、晩春とは若い女性にとっては一番寂しい季節なんですよ」という植田先生の解説を聞いて、へえ、そうなのかしら、ホトトギスは風流だし、実のところ晩春も大好きな私。もしかして、この詩の中で簾を巻き上げに来た鈍感女なのでは？ と肩をすくめた次第でした。

詩の解説の後はいつもの朗読練習をして、最後に植田先生がこの詞にメロディーを付けて歌って下さいました。朗々とした素敵な歌声に一同うっとりし、拍手喝采でした。

漢詩の世界といえば男性の世界。そんな中で彗星の如く現れた李清照。男性詩人には詠めない独特の〈詞〉を残しながらも、号は男性風に易安居士と名乗ったスケールの大きな才女。

「こんな優秀な女性を奥さんにもらうと旦那としては大変だろうなあ。それでも仲良くやっていたんだから、夫も偉いなあと思いますね。奥さんのお陰で後世に名を残せたわけですから、正に理想の夫婦、ですね。一般の男性にとっては、どうかわかりませんが……。また、李清照は再婚した後、すぐ別れたという説もあるんですけどね、元の旦那が良すぎたんですね。」

煌めく才能を持ち、夫と愛を育んだ魅力ある女性。また大酒飲みで男性達と対等に渡りあうという豪放さ、そして何より、時代のもたらした不幸にも屈せず夫と自分の作品、そして名声を後世に残すという結果を出す強さも併せ持った李清照。中国女性から尊敬と絶大な人気を得ているわけですね。

さて、会の最後はメンバーの質問に次々とお答

え下さるコーナーもあり、参加者にとっては楽しいひと時でした。

そんなフリートークの中で植田先生がして下さったお話を最後に報告を締めくくろうと思います。「若い頃、知識だけを詰め込んでいた時は、漢詩はちっとも面白くなくてね、年を重ねるごとに面白いなあ、と思うようになったんです。ところで漢詩は高齢者には良いですよ、認知症予防になると思いますよ(笑)。詩の鑑賞だけでなく作詩もすればもっと良いですね。論語が認知症に良いと言ったお医者さんがいらっしゃいましたが、私なんかは漢詩も効くんじゃないかと思っているんですよ」

最近スマホで漢詩を作れる時代になりましたし、私もあと10年、20年の人生経験を積んだら漢詩を作ってみようかと思いました。その為に各題材に困らぬよう、まだあと20年、興味の赴くままに色々楽しみたいものだなあ、というのが正直な感想。晩春を憂う気持ちなどどこ吹く風というアラフォー女子の報告でした。